

写真で見る

三浦庸子・北村皆雄 (インジニアルフォークロア)

巨文島

●写真提供

中村彰二、木村良春、松浦玲子、橋本嘉博



1

山口県豊浦郡宇賀村湯玉浦で大敷網の網元を営んでいた木村忠太郎・リム夫妻は一九〇五年（明治三八）一月の大火（村の半数の一七〇軒消失）で一切を失った。これは再起をかけて巨文島に移り住む決心をした夫妻が、焼け残った石垣の前で写した記念写真。当時ロシアとの対立を深めていた日本は、艦艇の集結や軍用に使える土地を確保し日露戦争（一九〇四〜一九〇五）に突入していた。日本は財政逼迫を領土領海の拡充で解決しようとしており、この戦争に勝つことで朝鮮の植民地化を大きく進めた。一八八三年（明治一六）まず日本政府は鮮海出漁の権利を獲得、一八九七年（明治三〇）には朝鮮、沿海州等に出漁する漁船に補助を与えて奨励している。さらに一八九九年（明治三二）時の外務大臣より駐韓公使宛に「我漁業者ノ使用ニ供スルノ名儀ヲ以テ實際陸海軍ノ用ニ供スヘキ土地ヲ韓国ヨリ借受置キ候方可然ト存候」という外交機密文書が送られている。これを受け六月には水産局が朝鮮沿海漁業の視察を実施しており、その後、朝鮮近海出漁が有望であることを、山口県を始め二三府県の津々浦々で盛んに遊説してまわり、出漁奨励金を下賜して漁民移住を促進した。一九〇五年に出された『韓国水産業調査報告書』には、巨文島が有望な漁場であると報告され、さらに「移住民ヲ奨励シ韓国各地ニ日本人ノ聚落ヲ成サシムルコト」また「韓国沿海ニ吾漁村ヲ組織シ漁民ヲシテ漸次韓国ノ風習ニ慣熟セシムルト同時ニ韓国民ヲ我国風ニ同化スルコトニ勉ムルコト」とある。政府のこの移住政策の下に、一九〇四年（明治三七）初めて韓国に建設された漁村は慶尚道巨濟島の長承浦（後の入佐村）であった。ここでは朝鮮海水産組合が結成され、主に海軍に供給する魚類缶詰を製造した。一方で同島の松真浦には一九〇四年海軍基地が置かれ、一九一二年（明治四五）鎮海に移されるまで重要拠点となったのである。一九〇五年二月には京城に韓国統監府が設置され、初代統監に伊藤博文が就任した。日本は朝鮮の外交権を掌握し保護国としたため、反日の世論が高まっていた。

木村忠太郎の移住は、こうした情勢下で行われた。

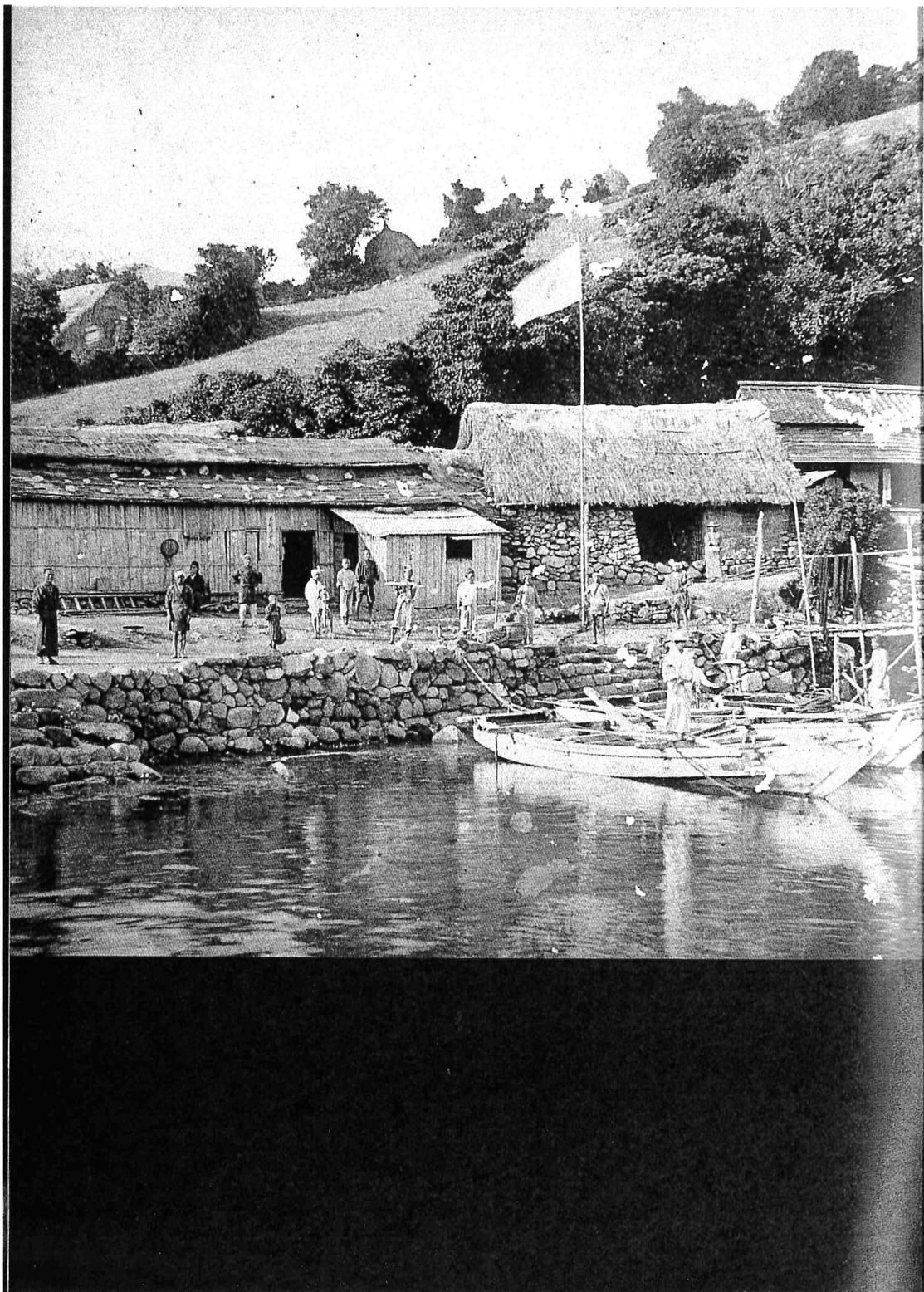


2

一九〇五年（明治三八）四月、巨文島に渡る直前、リムの実家の前で撮った一家の記念写真

左から木村忠太郎（三五）・長勇光太郎（八）・リム（三四）・三男満多三（二三）・次男筆之助（一六）

万が一の危険を考え巨文島には三男のみを伴い、跡取りの長男、次男はリムの父母のもとに残した。県からの奨励金で整えた大敷網一張、家財、食料を満載した船で夜に湯玉を出発。県から与えられた護身用の小銃と短銃を携行した。折から対馬付近は、日露戦争の日本海海戦直前で緊張しており、対馬に一次上陸、待機した。五月二十七日朝、北上するロシアのバルチック艦隊を対馬沖を航行中の信濃丸が最初に発見「敵艦見ゆ」と打電したのを無線中継したのは巨文島「前水越山頂に設置された無線塔だったという。日本軍は日清戦争が勃発した一八九四年（明治二七）巨文島の同山に保壘を建設ついでこの地を海軍基地鎮海の前哨基地つまり無線、海底ケーブルの受発信基地としていた。巨文島は有望な漁場である以前に軍事上重要な地であった。



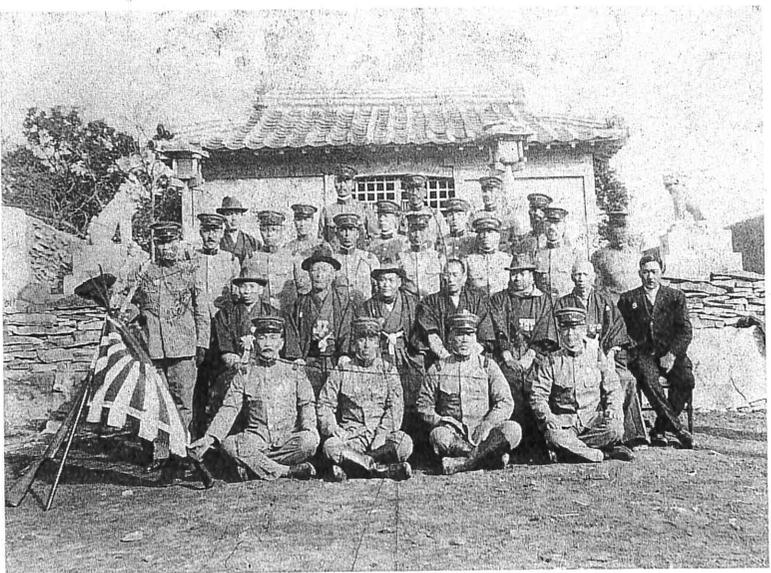
日露戦争に勝利し、伊藤博文が初代韓国統監として京城に赴任した直後の一九〇六年（明治三九）四月、ようやく巨文島に到着。三つの島の中で最小の古島、かつては倭寇の基地で「倭島」と呼ばれていた無人島に掘立小屋を建て、西島や東島の韓国人を使って漁を始めた。入植当初しばらくは、用心のため夜間は家を出て、畑に積み上げられた肥料用の干藻の中に身を潜め、忠太郎は護身用の小銃を、リムは短銃を身から離さず休んだという。反日の嵐が吹き荒れる中、一九〇九年（明治四二）六月には伊藤博文が暗殺された。

写真は入植四年後の一九一〇年（明治四三）七月一日、陸軍写真班が巡回した折りに撮影したものの。中央の白い着物に白鉢巻が木村忠太郎、隣に立っている子供は三男満多三、小屋の前に座っているのがリム。手前の舟は大敷舟。三隻で一網を操業していた。大敷網は湯玉浦が発祥の地とされる近代的定置網漁法で、一度に大量の漁獲を得られるため瞬く間に五島、対馬、平戸など西日本各地に広がったという。木村忠太郎が巨文島の大敷網でねらった魚は主に小羽イワシとサバ。鮮度の良い内に茹で上げ十分に天日干した小羽イワシは、金色に輝く最上級のイリコとなった。これと塩サバを大量に供給できると踏んだ忠太郎は、明治の終わりまで次々と親族を湯玉から呼び寄せ、対馬経由で下関、神戸、大阪間を往復する運搬船業を含めた分業体制を敷いた。やがて巨文島のイリコは関西の高級料亭で評判となり、塩サバは北九州の炭鉱中でひっぱりだこになった。木村忠太郎は一躍成功者、巨文島の水産王と紹介されるようになる。



同じく一九一〇年七月一日撮影。天然の良港で、右の波止場は暴風時には格好の舟の避難場所となった。屋根を被せたのは地元韓国舟。高台に見える家はこの年に出来た駐在所。後続して湯玉から来た人たちの家々も建ち始めた。

同年八月、日韓併合となる。



5

明治の終わりまでに木村一族の他、山口県萩三見出身の大野栄太郎・栄作親子も釜山より巨文島へ移住した。漁業が軌道に乗ったころより、波止場や海岸通りの建設・整備に着手、漁と航海の守り神の金比羅さまも奉祭して、次第に漁村の体裁を整えていった。大正七年には日本人九〇戸、三二二名を数える。山口県の他、長崎、熊本、鹿児島、愛媛、香川、広島、島根等、西日本各地からも人が集まり、南鮮における注目すべき漁業根拠地に発展していった。こうした中、在郷軍人会の設立が急務となる。最初は全羅南道の南海岸にある一大漁業基地、麗水の日本帝国在郷軍人会麗水分会の第五班として発会したが、それから一年と経たぬ一九一九年（大正八）一〇月三十一日には、早くも巨文島分会として昇格、独立した。これはその時の記念写真。役員選挙によって初代分会長には小学校校長栗原信義が選ばれ、会員総勢二〇名、名誉会員の木村忠太郎ら七名も加わり金比羅神社前にて撮影した。分会は、万一に備えて銃器・防具・軍服を整えて自衛体制を敷き、昭和に入ると軍事訓練も実施、次第に戦色濃くなる中で島より男子を召応させたり、地方巡視の軍幹部の応対に当たったが、また一方では島の自治組織でもあり、港湾の修理、整備、道路の建設などを取決めては推し進めた。創設時は島民の寄付金を、やがては島中の新聞の取次ぎ販売の収益等を活動資金に当てた。



6

一九二八年（昭和三）一月、昭和の御大典（昭和天皇即位式）祝賀会で赤穂四十七士の仮装をした時の記念写真。金比羅さん前で。当時の島の若手名士総出演。

豊かな財力に支えられ、木村一族をはじめ中村満多三や堀平吉、愛媛出身の宇都宮商店の息子で島から東京の写真専門学校に遊学した宇都宮忠男らは、頻繁に句会や歌会、音楽演奏会、美術の会等を催しては楽しむといった文化人であった。島の行事の出し物にはいつも競って工夫を凝らし、皆を楽しませた。

この島の写真が当時としては数多く残っているのは、高価な写真機を購入し趣味としていた人々がいたからで、宇都宮忠男や、松浦医院の松浦儀一などの貢献が大きい。



7
一九二九年（昭和四）木村忠太郎・リムの遷居の祝いに集った一家。木村家の縁側にて。後列左より忠太郎、リム、木村チエ（光太郎の妻）、中村千代子（満多三の妻）。前列左より光太郎、麗子（満多三の長女）、恵美子（光太郎の次女）、カヤ子（光太郎の長女）、良春（光太郎の三男）、彰二（満多三の長男）、中村満多三。

8
一九三〇年（昭和五）船溜まりの臨海部を埋め立てて建てられた巨文島製氷株式会社前より島の表玄関を臨む。森の中央の長屋根が木村忠太郎の家、右上の高台には忠太郎の別宅も見える。左の長屋に煙突の立っているのがイリコの製造所と倉庫である。真ん中の二階屋は商業基地のシンボルとなった長門屋旅館・中吉商店。大野栄太郎の次女ツネが漁師の中村吉蔵に嫁して商売をはじめてから発展し代を築いた。

日本本土の沿岸漁業が行き詰まり、朝鮮半島へと一斉に目が向けられた。巨文島は西日本全域から訪れる漁業船団の一大集結地へと発展し、島はもはや一漁村にとどまらず一大補給基地、商業基地へと変貌を遂げようとしていた。

巨文島漁船

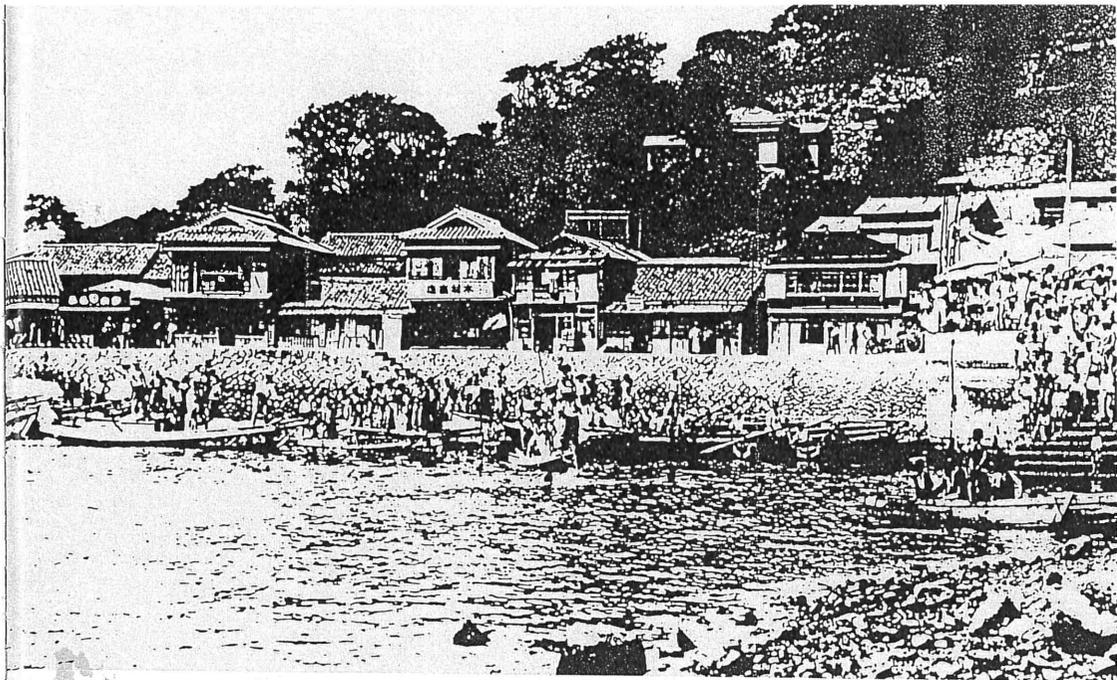




9
一九三〇年（昭和五）頃の港の賑わい。左手前は製氷会社。向かいの島の集落は徳村（トクチョン）で朝鮮伝統の藁屋根の家屋が巨文島の日本村と好対照をなしている。松浦儀一が松浦医院辺りで撮影したもの。



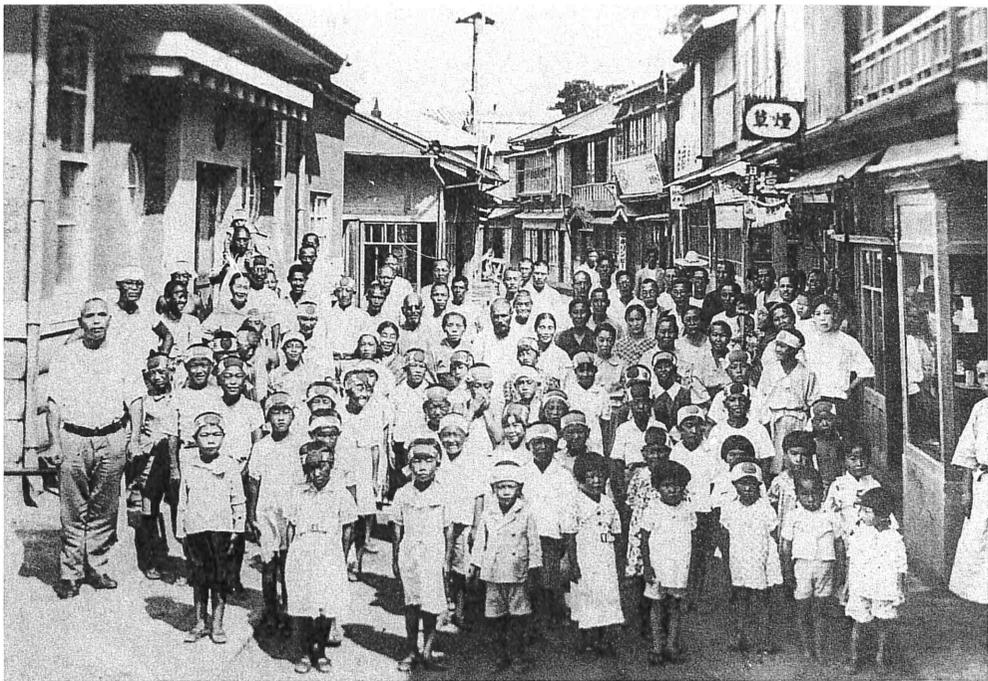
10
一九三四年（昭和九）頃の大師堂。お大師さんをお守りしたのは主に香川県出身者であった。中央は上村住職。
大師堂の向かい側には、外地での布教に熱心だった浄土真宗の寺、巨文寺が一九二八年（昭和三）に建てられている。住職は布教師として派遣された山口県出身の水室敬心。歌人で、若山牧水の弟子であったという。



11

一九三五年（昭和一〇）頃。毎夏恒例の小学校行事で小学校三年生から高等科二年生までが参加した遠泳大会の出発前のひとコマ。大人たちもこの日はかりは総動員で伝馬船に分乗し、子供たちに伴漕した。

島の目抜き通りは整備され、続々と新しい家々が完成。島専住の大工の棟梁は一人で休む間も無かったという。かつての無人島の表玄関はすっかり日本村となった。毎年初夏から仲秋のサバ・アジの中着網漁の最盛期には大手の水産会社や中小漁業会社の船が大挙して訪れ、早朝二〇〇隻もの船が一斉に出漁。夕刻には大漁旗をなびかせて帰港する賑わいで、島は大景気に沸きかえった。このころになると、先に入植して漁業を営み財をなした人たちは、ほとんどが、季節毎に訪れる漁業会社や漁師たち相手の商売に転業していた。旅館、米屋、塩屋、料亭、カフェ、遊郭、カマボコ屋、豆腐屋、風呂屋まで出現した。病院は、二軒。港の土地柄、性病患者が多く、カメラが趣味だった松浦院長は「巨文島の横根医者」の異名もあつた。商店は各船団と特約を結び、船が入る毎に、米五〇俵、塩三〇俵、醤油一樽といった大振りの注文を受けた。支払いも親方が一時に済ませて、細かいことは一切言わなかったの、いやでも儲かったという。六、七、八月と商売すれば、一年中食べていけるような金の成る島であつた。

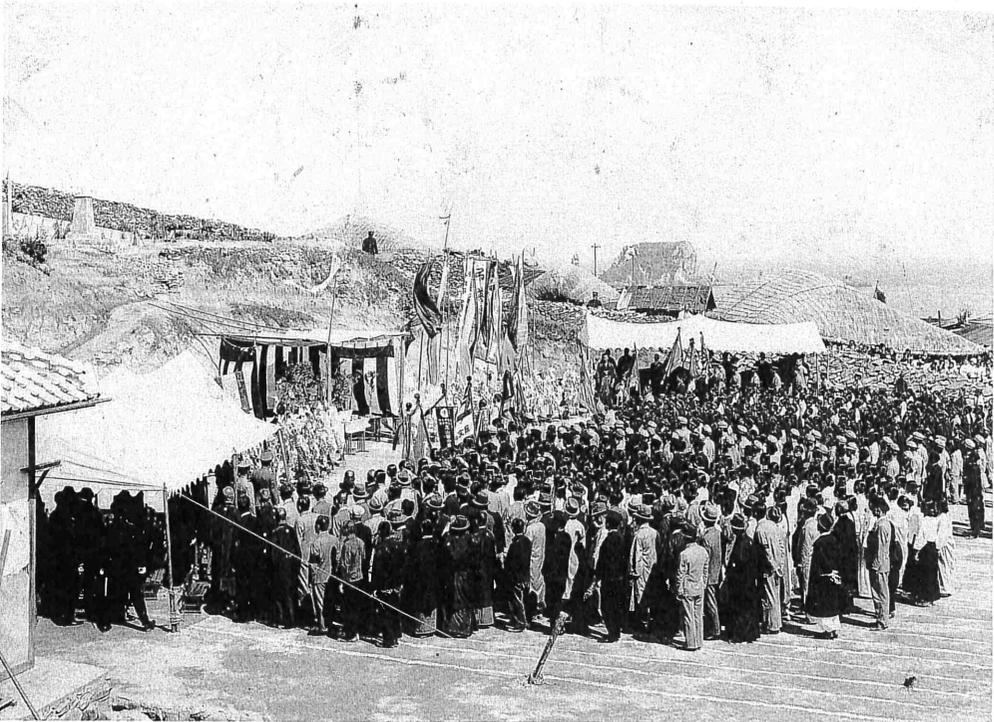


12

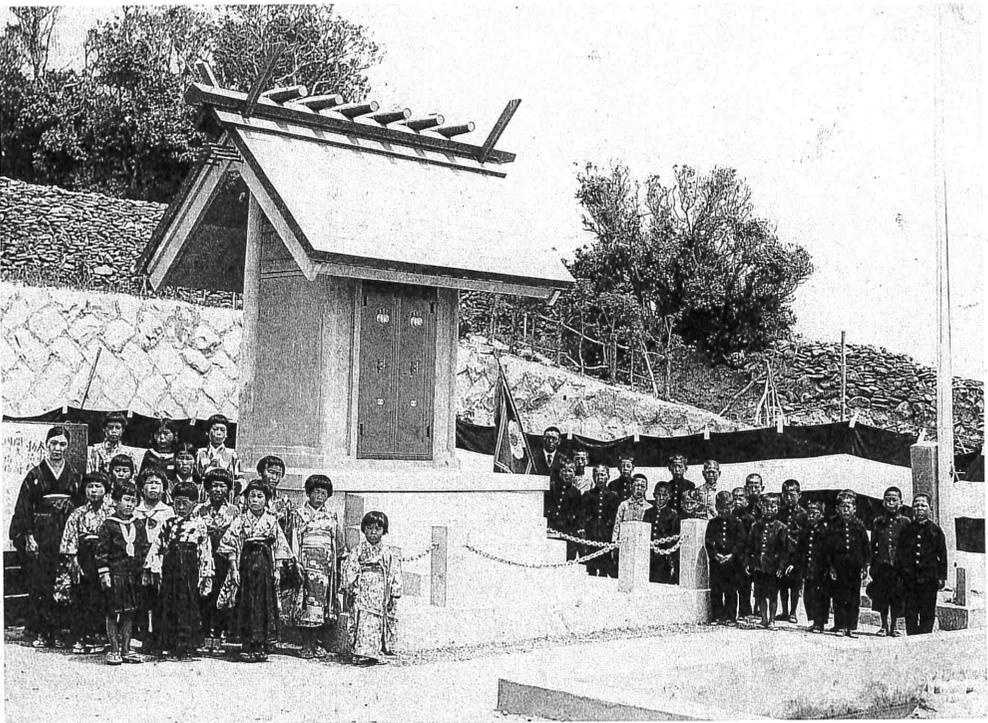
一九三七年（昭和一二）夏休みには毎朝六時半より親子して漁業組合の前に集まりラジオ体操をおこなった。



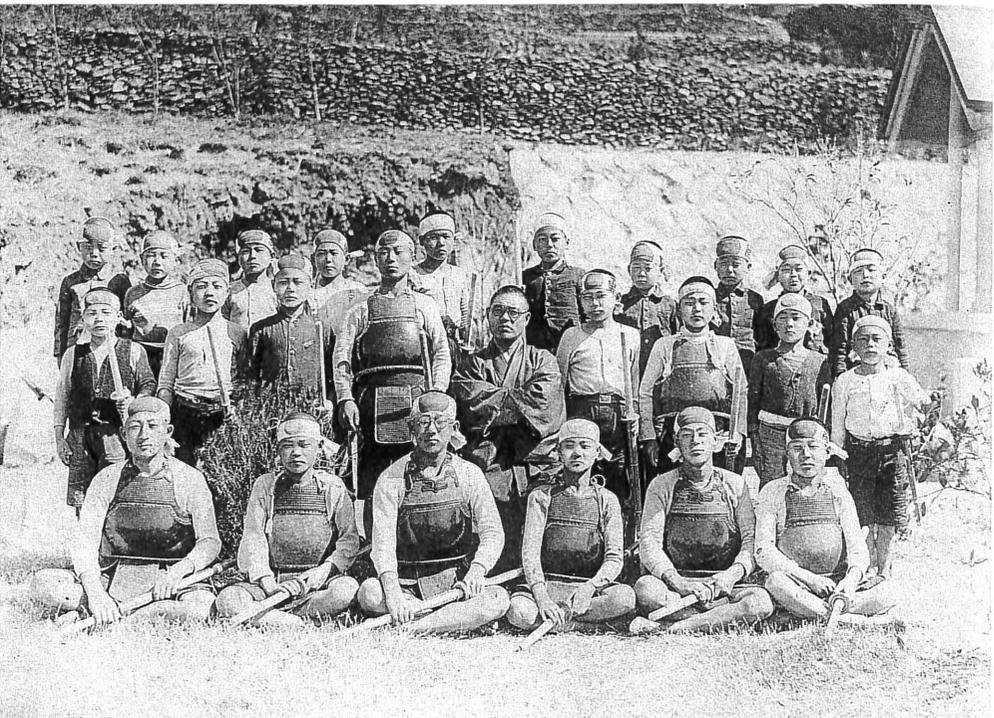
13
一九三七年（昭和一二）この年日中戦争が勃発。シンガポール陥落のニュースに島では祝賀パレードを行った。目抜き通り沿いの建物は右の三階建てが中野旅館、ひとつおいた二階屋が宇都宮商店、次に堀商店、続いて銭湯、平和湯。その向かい側の建物は漁業組合。



14
一九三八年（昭和一三）五月七日巨文島小学校校庭において前田廣上等兵の郡（全羅南道麗川郡）民葬が盛大に行われた。関東軍に入隊後、日中戦争勃発と同時に北支山西で転戦、三井鎮の夜戦で重傷を負い、巨文島初めての戦死者となった。



15
一九三八年（昭和一三）小学校校庭を見おろす一段高い所に奉安殿が完成。落成式を行う。中には天皇皇后の御影と教育勅語が祀られた。



16
一九三九年（昭和一四）剣道大会で居並ぶ少年剣士たち。真ん中が菅原菊治校長。その左後ろは猪塚勝美。中列左より、土井節男（土井鉄工所の長男）、木村良春、一人おいて申轍安（申大中間長の長男）、校長の次が元容全（徳村の人）、中村吉典（中村ツネ三男）、中村彰二（満多三の長男）、菅原俠治（校長の次男）。前列左より朴伍長、橋本嘉博（長崎五島出身の漁師の次男）、金正圭（中吉の番頭の一人息子）、金基洙、上貝義運（島根出身の木工の三男）、金日龍（後、朝鮮動乱の折スパイ容疑で銃殺された）

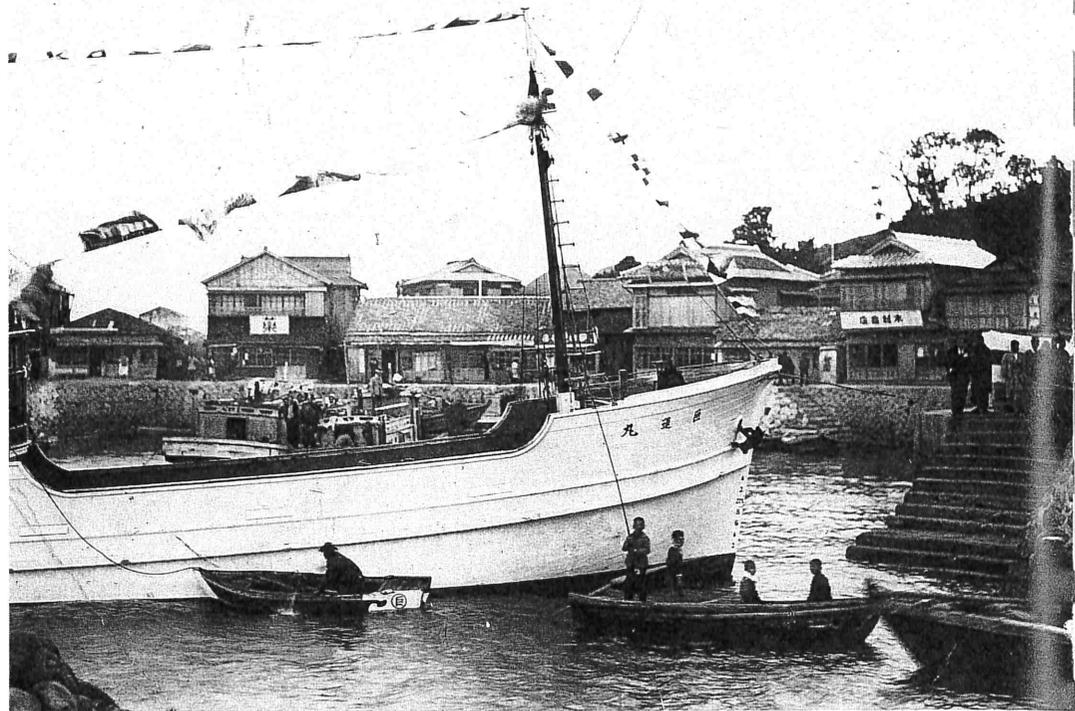


17

一九三八年頃、巨文島小学校前での記念写真。巨文島の主だった人々が居並ぶ。前列左より朴前面長、木村光太郎、二人おいて警察署長、申大面長、その後ろは中吉商店の女将中村ツネ、㊦へ宇都宮商店の夫人、四人おいて大野栄作夫人、松浦儀一夫人、久保田夫人、木村チエ（光太郎夫人）、菅原校長夫妻、愛国婦人会の集まりの折かと思われる。和服にたすき掛けは日本の会員たちで、左上の一群は料亭のきれいだころ、白いチマ姿が朝鮮の会員たち。活動も島中、日鮮一体で行った。

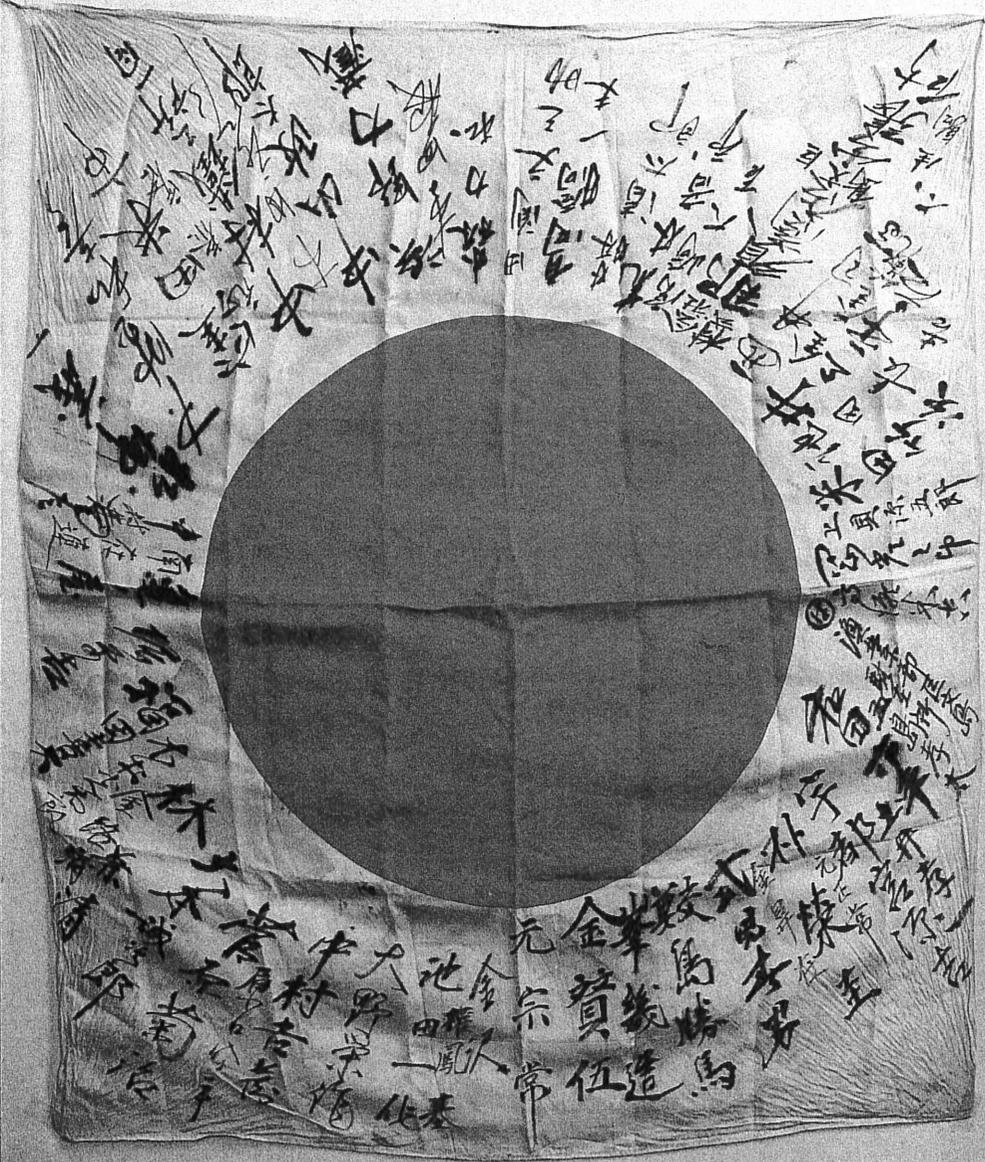
このころ、島には日本人八七戸、三五五人、朝鮮人一〇八戸、五〇〇人が住んでいた。公立尋常小学校はすでに一九二五年（大正四）に開校していたが、海を見下ろすこの高台に新校舎を作ったのは一九三〇年（昭和五）である。日本人学校だったが例外的に朝鮮の子弟も何人かが通学していた。しかし、ほとんどは巨文島（古島）、西島、東島にそれぞれあった普通学校に在籍した。巨文島小学校では普通の教科課程の他、週に一度朝鮮語の時間があり、朴前面長が教えに通った。

右



18

一九三八年（昭和一三）巨文島漁業組合の持ち船、巨運丸が運搬船として活躍した。島には一本釣り専門の漁師たちも多数来ており、タイ、サワラ、ブリ、チヌ、ヒラス等の高級魚を専門に捕った。漁獲は氷詰めにして巨運丸で下関に送り、帰路は漁具や日用雑貨等を仕入れて持ち帰った。



一九三八年（昭和一三）長門屋旅館・中吉商店前に集合した巨文島愛国婦人会。廃品回収で基金をつくり活動した。前列右は巨文島の女傑とうたわれた、中村ツネ。番頭、経理には最も信頼の置ける朝鮮の人たちを起用し、一切をまかせて外との交渉事や活動に明け暮れた男勝り。番頭の子も自分の子として扱い、東京の学校に入れたり、引き上げ時にはそっくり家をゆずったりしている。その左に立っているのが、巨文島生まれの赤ん坊は全て取り上げたという山口県豊浦出身の産婆、杉本マツノ、その左は宇都宮商店の夫人、続いて増田郵便局長夫人、二人おいて襷掛けの座った女の子は中村ツネの四女寿恵子、続いて末っ子の千鶴子。左より二人目は朝鮮の料亭（笑楽亭）経営者、李厚根の夫人、その手前は娘の李甫任、李夫人の右は米田夫人。

一九三八年（昭和一三）橋本文吉が日中戦争勃発の翌年、杭州湾の戦地に赴いた時、島の人々からもらった寄せ書き。朝鮮の人のサインも交じっている。文吉は一九一八年（大正七）漁師の長男として巨文島で生まれた（嘉博の兄）。巨文島尋常小学校を卒業し、親の出身地長崎の青方高等科を経て、巨文島の郵便局に務めた。昭和二二年一九歳で佐世保海兵団に志願入隊。この寄せ書きを持って昭和一五年無事帰還したが、翌一六年再び召応したまま二〇年三月ジャワ沖海戦で戦死した。

島で豊漁と航海安全を祈っていた「金比羅さま」は、戦争最中の昭和一七年、朝鮮総督府からご神体を分祀されて「三島神祠」と格上げされ、巨文島三島の総社として出兵兵士の精神的拠り所とされた。日本人だけでなく朝鮮の人々も徴兵され皇国臣民として出兵していった。吾が国のためにはなく、よその国に忠誠をつくすために妻子を残して行くのは後ろ髪を引かれる思いだったが、どうしようもなかった、と当時徴兵された人はその時の複雑な心境を語っている。

やがて敗戦の色濃くなった昭和二〇年、巨文島の漁港は海軍の前哨基地になっていった。巨文島に集結しここから戦いに出て行く兵士たちを、島の娘たちはいつも神社のある高台から手を振り見送った。しかし、ほとんどが沖合いに出るとすぐに撃沈されたという。爆撃の炸裂音だけが聞こえてしばらくすると、潮の具合いによつては死体や怪我人が次々に流されて島の湾内に打ちあげられた。亡くなった人は焼き場まで持っていききらずにその場に山のように積み上げ油をかけて焼いたので、その臭いが島中に広がった。かつて豊かな楽園さながらだった巨文島とその周辺の海域では地獄絵が展開していた。そしてついに終戦。三九年間住み慣れた巨文島を去る時が来た。慣れ親んだ多くの朝鮮の人々が別れを惜しみ見送った。日本への引き揚げ船に身を隠してまでついてきた人もいた。

巨文島分会史に記す。「八月十五日 十三時燈台通信隊村上等兵終戦ノ大詔渙発セラレタリトノ報ニ接シ驚愕ス 人心為ニ大イニ動揺セリ」八月二十七日 幾変遷ノ歴史ト輝カシキ功績トヲ織リナシタル分会旗ヲ奉持シテ思出多キ第二ノ故郷懐カシノ巨文島ヲ肅然ト去ル さらばよ巨文島!!」